

ウイリアム・フォークナー

——人と作品——

一九六二年七月六日に心臓麻痺という突然の死でもって、ウイリアム・フォークナーを失ったことにより、そのほぼ一年前に、猟銃による自殺⁽¹⁾という劇的な死にかたをしたアーネスト・ヘミングウェイにつづいて、我々は偉大な作家を二人まで亡くしてしまった。俗に「巨星墜つ」というけれども、この二人の死こそこの表現にふさわしいと思う。いま、この二つの巨星のうちの一つ、ウイリアム・フォークナーについて、その人となりを見、業績について考察しようとするに当って、一つ困難があることを最初に断っておくべきだろうと思う。その困難とは、彼の伝記を書くことの困難である。作品の解釈はそれを読む人間の自由にまかせられるが、伝記となれば

平野 信 行

そうはいかない。そこに登場する事柄は厳然として存在する事実であり、本来そこに仮想や想像の介在する余地はないはずである。ところが、フォークナーについて伝記を書くこうとすれば、曖昧なこと、不明なことがここかしこにあるので、いきおい推断臆測のやむなきにいたるのである。我国にあって伝記を書くよりも直接資料に触れるのがはるかに容易なはずである彼国の学者のものした伝記にしているからがそうなので、試みに、一、二冊とりあげて頁を繰ってみるとよい。そのなかに、*seem, apparently, supposedly, might be* といった、いずれも直接断定を避けた語が数多く用いられていることに気がつくことだろう。筆者がこれからふりかえってみようとしてい

るフォークナーの生涯にしても、これら不確かな伝記資料に基かざるを得ない。右にあげた語にもう一つ、*according to* という表現を加えてよいと思うが、この「人と作品」はいわば、*according to* にもう一つ *according to* がついたものになるだろう。

人の一生を振り返ってみるとき、その数に相違はあるにせよ、なんらかの形で重大な影響をうけた人物が必ず何人かあるものである。フォークナーの場合も、その例外ではなく、少くとも三人の名前をあげることが出来る。たとえば、その影響の及ぼしかたは違っている。その三人とは、曾祖父ウィリアム・カスバート・フォークナー (William Cutbert Falkner)、友人フィル・ストーン (Phil Stone) それに先輩作家、シャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson) である。この三人を中心に、フォークナーの生涯を振り返ってみようと思う。

一 フィル・ストーン

—— 誕生から修業時代まで ——

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) (この方のスペリングには、*no* が入っていることに注意された)

は一八九七年九月二五日、ミシシッピ州の小都市・ニュー・オールバニー (New Albany) に四人兄弟の長子として生まれた。父は、マリー・チャールズ・フォークナー (Murry Charles Falkner) 母は、モード・バトラー (Maud Butler) といつた。ここでフォークナーの綴りについて一言しておこう。この綴字には *Falkner* と *Faulkner* の二種類がある。ふつうフォークナーというときには後者の綴で書くのだが、彼自身は、二種類を両方とも用いている。「人名録」には前者が載っているという。そこで一体どちらが正式なのか、後にフォークナー再認識のきっかけを与えるもとなつた、ポータブル・フォークナー (*The Portable Faulkner*) の編者であるマルカム・カウリー (Malcolm Cowley) が問うたことがある。それに対して、フォークナーは、前者、つまり、*no* のない方であると答えている。しかしながら、なぜ *Falkner* なのか、あるいは、いつ *no* を入れたものを使うようになったのかは答えていない。要するに彼にとってはそのようなことでもないことなのであって、彼のいうところによれば、

I myself really dont know the true reason. It just

seemed to me that as soon as I got away from Mississippi, I found the "u" in the word whether I wished it or not. I still think it is of no importance, and either one suits me. ^(as)

ということになる。彼にはどうでもよくても、こちらには気になることなのだが、教えてくれない以上はやむを得ない。少々伝説めくが、^(as)が「u」がないことについて一つ紹介しておく、もともとは「u」があったのだが、曾祖父の時代のこと、近隣の町に同名のよからぬ輩 (some no-good people) がいたので、一緒にされては「ごめんと「u」をとってしまったのだ」という。フォークナーの生れた町の呼び方をニューヨークのオールバニーと区別するためにわざわざオルベイン⁽⁴⁾と発音する土地の人間がいるそうだから、この話もあるいは本当のことかもしれないが、どうも出来すぎているような気がする。

名前のことでだ、道草を食ったので先をいそごう。誕生の翌年、父親の職業の関係でリプリー (Ripley) という町に移り、それから四年後にはオクスフォード (Oxford) へと移った。リプリーはフォークナー一家、とりわけ、曾祖父と縁の深い町であり、オクスフォードは母

の生れた町であり、郡庁所在地である。彼は生涯の大部分をこの町で過すことになるのであり、後に詳しく触れるつもりだが、いわゆる「ヨクナパトリーファ物語」の中にジェファソン (Jefferson) として出ているのは、このオクスフォードをモデルにしたものである。幼年時代のフォークナーは穏やかな性格で殊のほか読書を好んだらしく、祖父が豊富な蔵書をかかえていたためであった、専ら、読書にあけくれしていたらしい。少年フォークナーについてはこんな逸話がある。学校で担任の先生に将来何になりたいかときかれたとき、「大祖父さんのような本を書く人になりたいです」と答えたというのである。大祖父さんとは、もちろん曾祖父ウィリアム・カスバート・フォークナーのことである。彼は、政治家・軍人・実業家・文人その他の方面に名をなしたのであるが、フォークナーがこれらのうちの文人を自らのうちにとり入れたことは、少年の心にその方向が最も入りやすいという事実を考慮に入れたとしても、意味のあることである。作家フォークナーはこの時すでに胚胎していたといっても過言ではないであろう。

フォークナーが学校教育を満足にうけられたのはグラ

マー・スクールだけで、ハイ・スクールや大学の教育もいったん受けるには受けるのだが、すべて途中で終わっている。こうした時にあって、彼を指導し、助言を与えたのがフィル・ストーンである。彼の力がなくしては、後の作家フォークナーは生れなかったであろう。彼の生涯を考えると、フィル・ストーンが存在を忘れることは出来ない。彼は曾祖父の名声によって胚胎したフォークナーの作家性を大きく守り育てる役割を果たしたといつてよからう。といっても、フィルは文学専攻ではなく、専門は法律である。しかし、文学に深い関心を持ち、理法力も相当あったようである。フォークナーの文学的素質を認めると、彼は、読むべき本を推薦したり、自分の蔵書を貸し与えたりした。実弟の書いた回想記によると、フィルは古い大型のスタンダードベーカーに本を満載してやって来、フォークナーは静かな路傍で読書に耽ったというから、いわば個人相手の巡回文庫を作ったわけである。ただ本を読むようすすめたり、貸したりしただけではない。彼の書くものを批評し、助言を与えたというから、専門が法律であることを考えれば、いかに文学に関心があったとはいえ、たいした能力があったものだと驚

かざるを得ない。しかも、彼の素質について、彼の将来性については誰にでもわかったはずというのだからますますその感を深くする。こうして、フィルの指導で読書を進めているうちに、十六歳の時「スウィンバーン(Swinburne)を発見」する。このことは、フォークナーの作品における影響関係を考える上に重要である。

文学修業を積みながら、一時期祖父の経営する銀行に就職するが、性に合わないとみえてまもなく辞めた。しかし、この時期はあるいみで彼にとっては楽しい時期であった。というのは、幼い時から親しかったミス・エステル・オールダム(Miss Estelle Oldham)との間がますます親密になり、フォークナー自身結婚まで考えたからである。銀行を辞めてしばらくぶらぶらしていたが、一九一八年の四月、ニュー・ヘイヴン(New Haven)に行つて、たまたまそこにいたフィル・ストーンに頼り、兵器製造会社で働き出したものの、やがてのことに、そこもやめてしまった。そして同じ年の七月にカナダのトロントにあるイギリス空軍の訓練隊に入隊する。彼自身は飛行機にのつて戦争に参加したかったらしいが、一九一八年七月といえ、大戦も末期で、ついに実戦に参加し

ないうちに終戦になってしまった。実弟によると、彼が入隊する気になったのは、結婚相手ときめていたエステルが他の男性と結婚したためだといふ⁽⁶⁾。あるいはそうかもしれない。後に発表した作品の中に飛行機に関する記述がしばしば出てくるが、それらは、この時の経験が基になっていと思われる。そういえば、彼がはじめて公にした短篇小説(“Landing in Luck”)は、イギリス空軍の訓練基地を舞台にトムブソンという訓練兵を中心にした物語であり、航空用語がふんだんに出てくる⁽⁷⁾。除隊後は郷里に帰って詩作などしていたが、翌一九一九年の九月、父がミンシッピ大学の事務官をしていた関係もあり、同大学の特別生となった。これはしかし、彼のいうところによると、全く父の強制であって、彼自身は行く気持がなかったという。そのためでもあろう、大学ではフランス語やスペイン語はよく出来たが、英語は出来が悪かったそうである⁽⁸⁾。そして学業よりはスポーツに熱を入れていた。だが、この大学生活は決して無為に終わったわけではない。この時期は、フォークナーの文学修行時代で大切な時期である。というのは、大学在学中に、そして卒業後も彼は校内誌や年報に寄稿し、挿絵を書く

等の仕事をしており、その内容は未熟ではあるが、将来性を示しているからであり、初期の小説について指摘される世紀末文学的特質も、この時期にまで跡づけることが出来るからである。たとえば、彼の描いた絵はピアズレー風のものであり、彼の書いた詩にはスウィンバーンのな色彩が濃い⁽⁹⁾。もちろんフォークナーの代表作といえは「響きと怒り」(The Sound and the Fury)やその周辺の作品を挙げるだろうし、それは間違っていない。しかし、それらの傑作も突然にあらわれたものではなく、習作の時代を経て作られたものである。そのいみでも、彼が大学に関係していた時期に発表した作品にもっと光をあててよいと思うのである。

ハイ・スクールの時と同様、せっかくの大学も中途で退学し、しばらくして、ニューヨークへ出た。その目的の一つは出版社に縁をみつめて自作を出版することだったそうである。この方の目的を達することは出来なかったが、そのかわりに、彼が勤めていた書店のマネジャーをしていた、エリザベス・プロール(Elizabeth Prall)と知り合いになった。彼女は後にシャイウッド・アンドソン夫人となる女性であり、彼女を通して後に知己を得る

アンダソンこそは、彼の作家生活の上に絶大な影響を及ぼすことになるので、彼女に会えたことは全く幸運であったというべきである。

ニューヨークから帰った彼は、以前に籍を置いたミシシッピ大学の内郵便局の局長に就任した。この局長はおそらく最低の局長であった。仕事はなまけ放題に怠け、読書には精一杯力をつくした。こんな局長が長つづきするはずがなく、非難の声は次第に高まり、一九二四年の秋ついに辞めなければならなくなった。もとより好んで就任したわけではなく、友人フィルのたつての勧めをうけ入れてのことだったので、おそらく辞めることとはのぞむところだっただろう。しかし、辞めるにしても、おとなしく辞めることはせず、彼を非難した者達をチクリと刺すことを忘れなかった。その辞職の言葉には次のようにある。

As long as I live under the capitalistic system, I expect to have my life influenced by the demands of moneyed people. But I will be damned if I propose to be at the beck and call of every itinerant scoundrel who has two cents to invest in a postage stamp. This, sir, is my resignation.⁽⁹⁾

皮肉といおうか、痛烈といおうか、とにかくよほど腹にすえかねたらしい。

同じ年の暮十二月、フィル・ストーンの出資によって、処女詩集「大理石の牧神」(The Marble Faun)がボストンの出版社から出た。⁽¹⁰⁾この詩集は献辞に「母上に」とあるが、フィル・ストーンが説明しているところによると、本詩集に収められている詩の大部分の稿は除隊後の一九一九年春から夏にかかっているということ、入隊の動機にエステル結婚が入っているということ、さらに、この詩集の全体の雰囲気は暗く、悲しい気持を歌っており、その悲しみの対象が過去にあるということ、これらの事柄を総合してみると、「母上に」という内実はエステルなのではないかという気がしないでもない。そのせんさくだては別のこととして、「大理石の牧神」の内容についてみると、これとは別に、一九一九年八月六日号の『ニュー・リパブリック』(New Republic)誌に掲載され、後にやや書き直した形で『ミシシッピ大学の学生新聞』『ミシシッピアン』(Mississippiian)に載った「牧神の午後」(L'Après-Midi d'un Faune)との題名の比較から想像されるように、牧歌的・田園詩的情調が豊

かに感じとられ、彼がフランス象徴詩に多分の関心をよせていたことが理解できるのである。ただこの詩集の場合について特徴的なのは、象徴詩の影響が看取されるものの、純粹にそのものではなく、その中に彼の世紀末文学趣味が入っていることである。それゆえ、詩としては奇妙な効果を挙げてはいるけれど、なにかしら不自然さを感じさせる。この傾向は、大学時代に書いた詩に特に著しい。しかし、この不自然さを欠点として非難するのは酷であろう。ただし、青年期において複数の対象に興味を覚えてそれらを自己の詩作にとり入れるということはいからである。そうした不自然な要素が次第に整理され、醸成されて行く過程が、とりもなおさず、修業時代から次第に一人立ちして行くことなのである。それは、フォークナーの場合の醸成過程はいかなるものであったろうか。この段階の彼にもう一人指導者があらわれた。といっても、彼の方から求めたというべきであろうが。その人物がシャーウッド・アンドソンである。

二 シャーウッド・アンドソン

——作家としての出発——

シャーウッド・アンドソンに会うきっかけは、フォークナーが、ニュー・オールリーンズを訪れたことから生まれた。彼がミシシッピ大学ミシシッピ大学の郵便局長を辞職した翌年の一月、フォークナーはニュー・オールリーンズに向った。その目的はヨーロッパへ行くためのつてを求めてということが主であったといわれる。そのころ、アメリカでは若い作家志望者が、自国の文学の伝統に満足出来ず、続々ヨーロッパに渡り、主として、パリに集まってサロンを作った。いわゆる、「エグザイル」とか「国籍喪失者イットリエト」といわれる者達がこれである。フォークナーのヨーロッパ行きも一つにはこの時流に乗ったものとみてよいだろう。だが彼がそれら「エグザイル」の仲間に入らなかつたところをみると、個人的な理由、つまり自国の不評判に対する失望の気持が強かつたのではないだろうか。いいかえれば、自国の文学の伝統に満足しないというよりは、自分を評価してくれない、自国の文学環境に不満を抱いたのではなからうか。

ヨーロッパへ行きたいという希望もすぐには実現せず、いろいろな仕事をしながらその機会を待ったのであるが、その間に夫人を通してシャーウッド・アンダソンに会ったのである。彼はフォークナーはじめ若い世代の先達として重要な役割を果たしたのであるが、彼について、後にインタヴューの際こんな風になっている。

He was the father of my generation of American writers and the tradition of American writing which our successors will carry on. He has never received his proper evaluation. Dreiser is his older brother and Mark Twain the father of them both.

彼のいっていることは、シャーウッド・アンダソンのアメリカ文学上に占める位置を端的にあらわすものといつてよからう。後には不仲になったといわれるが、やはり偉大な作家として認めていたことがわかるし、ここには引用しなかったが、アンダソンの方でも「彼は才能がありすぎるのが欠点だ」といった位に、彼の才能を認めていた。そればかりか、彼のために積極的に出版の労をとっているのである。こうしてフォークナーの処女小説、「兵士の報酬」(Soldiers' Pay)は世に出たのである。こ

のように骨折ってくれたアンダソンの中にフォークナーが見出したものは何であったか。いくつかあげることが出来るであろうが、その第一は、テーマ、技法の漸新さであろう。例えば、代表作「オハイオ州・ワインズバーク」(Winesburg, Ohio)をとってみよう。その冒頭に「グロテスクの書」(Book of the Grotesque)として彼の考えを披瀝しているのはきわめて有名な事実であるが、ここについての「グロテスク」という考え方が漸新さの一つである。その中に、「人々が真実を知るとき彼等はグロテスクとなる」といういみの一節があるが、おそらくフォークナーとしては惹かれるところが十分あったにちがいない。次の章で述べる「ヨクナパトリーファ物語」の人物達に、アンダソンがワインズバークの人間達にみたグロテスクの要素が感じとれるからだ。ただ、ヨクナパトリーファの人間のグロテスク加減には、真実を知ったものと知らないものとの差があるという相違はあるが。もう一つフォークナーにとって関心があったと思われるのは、ワインズバークという架空の場所を設定して舞台を局限したこと、ジョージ・ウィラード (George Willard) という視点人物を置いたことである。彼の生れ育ったミ

シシッピー州という閉鎖的な社会を考えてみれば、しかも、彼自身がその閉鎖性の中にいたのであってみれば、作品の舞台を限定することは、当然考えうることである。この点からみて、彼がヨクナパトリーファ郡を設定する時に、ワインズバーグを考えに入れたと考えるのもよいであろう。また、彼の作品には、その者の視点から全体を語る「視点人物」(時により単数であったり、複数であったりする)が出てくるが、その構想に大きな関係があるのが、「オハイオ州・ワインズバーグ」であると思われる。その結晶が、「行け、モーゼよ」(*Go Down, Moses*)であると考えられよう。今、「ワインズバーグ」のみをとり出してみたのだが、他にたとえば「貧乏白人」(*Poor White*)における機械の侵略を「熊」(*The Bear*)における「文明」対「荒野」の問題に関係づけて考えることも出来よう。

前に述べたように、いろいろ尽してくれたアンダソンとフォークナーはいつのまにか不仲になった。直接の原因は、第二作の「蚊」(*Mosquitoes*)の中でアンダソンをモデルにして戯画化したためだといわれる。彼はヘミングウェイにも同じ仕打ちをうけているのだが、はじめ恩

義を感じていても、次第にそれに慣れてくると、煙たい存在になってくるのであるうか。あるいは、このあたりでふんぎりをつけて、自己の世界を開発しようと思ったのだろうか。いずれにせよ、アンダソンは、ヘミングウェイ、フォークナーと二人ながらに、あえて強い表現を使えば、裏切られたのである。もつとも、彼を裏切ったヘミングウェイは、後輩作家にパロディ化されているから⁽¹³⁾、フォークナーもやがて同じ目にあうのかもしれない。

アンダソンとの関係に字数を費しすぎてしまったが、フォークナーのニュー・オールリンス滞在中に、土地の新聞や雑誌に寄稿したことは落せない。たとえば、『タイムズ・ピカニオン』(*Times-Picayune*)紙や『ダブル・ディーラー』(*Double Dealer*)誌に短篇をよせている。それらは、カーヴェル・コリンズ教授のおかげで、*William Faulkner: New Orleans Sketches* (1958)として容易に読むことが出来、そのいくつかは、後の長篇の芽生えとも考えられるので重要である。

三 ウィリアム・カスバート・フォークナー

——ヨクナパトリーファ郡——

アンダソンのおかげで出版された処女作と第二作は、
いふなれば、テーマも技法も未整理の作品である。処女
作の *Soldiers' Pay* (1926) は、大戦で重傷を負った帰還
兵士とその故郷の町の人間との間で起る様々の事件を描
いたもので、戦争というものに対する前線と銃後の意識
の問題を含んだ、当時としては「身近な」テーマを扱っ
たものである。身近といえば、第二作の *Mosquitoes* (1927)
もそうで、彼が滞在していた、ニュー・オールリーンズ
に住むボヘミアン達の行状と思想を描き出したものでは
あるが、この中で恩義あるアンダソンを戯画化したとい
うので感情を害したという問題の書である。そういえば、
題名の「蚊」とは、彼等ボヘミアンを諷刺したもので、よ
うで皮肉にきこえる。このように扱いやすい身近の材料
を用いていけば、アプローチの方法によっては傑作が生
れる可能性があるのだが、二作とも売れなかったのは、
作者の意識の浅さによるものだろう。そのことは、たと
えば、同じ帰還兵士を扱ったものでも、ヘミングウェイ

の作品と比較してみれば理解されるだろう。長篇と短篇
とは比較にならないかもしれないが、ヘミングウェイ
の「兵士の故郷」(*Soldier's Home*) をとりあげてみる
と、短いながら、フォークナーの「兵士の報酬」よりは
卓れている。それは、なんととっても、ヘミングウェイ
が実戦に参加したという経験をもつ強味であろうし、そ
れだけに対象に鋭く肉迫することが出来たのであろう。
フォークナーの場合は、このテーマに世紀末文学風スタ
イルという色どりをつけているのである。そのためでも
ないだろうが、テーマ全体が曖昧になっている感が強
い。「兵士の報酬」とは「兵士として従軍したことの報
酬」の意であろうから、ここを追求すれば、さらにすぐ
れた作品が生まれたに相違ない。

話が前後したが、「兵士の報酬」が出版される前、フ
ォークナーは友人の画家、ウィリアム・スプラトリング
(William Spraying) とヨーロッパに出かけた。ほぼ半年
待った機会がようやく来たのである。ジェノアからスイ
ス、パリと旅し、パリに長く滞在した。しかし、一九二
五年の七月に出発して年も越さないうちに帰国した。前
記二作が出版されたのは帰国後のことであった。

「兵士の報酬」と「蚊」においては、作品の舞台を探して迷っていた感があるが、次の作品においてようやくその舞台を発見した。そのいきなつを彼自身次のようにしている。少々長いが、重要であるので引用しておく。

.....With *Soldier's Pay* and *Mosquitoes* I wrote for the sake of writing because it was fun.

Beginning with *Sartoris* I discovered that my own little postage stamp of native soil was worth writing about and that I would never live long enough to exhaust it, and that by sublimating the actual into the apocryphal I would have complete liberty to use whatever talent I might have to its absolute top.⁽¹⁴⁾

自己の創作の基にすべき世界を発見した喜びが満ちあふれている。右の文中で my own little postage stamp of native soil が、この後の作品群中でヨクナパトーフア郡 (Yoknapatawpha County) とよばれるところである。この長い名前は、インディアンの言葉だそうで、意味は「水が平地をゆるく流れ行く」ということだという。ここを舞台に描くにあたって題材に求めたのは、主として一家の歴史であったが、それには、彼の幼少年時の経験が大きな影響を与えているものと思われる。伝えられる

ところでは、フォークナー家の人々は、集まるとよく昔の話をしたそうである。その中には当然一家の歴史が出て来たし、それにより南部歴史が実感として把握されるようになったのだという。また黒人女のマミー・キャロライン・バー (Mammy Caroline Barr) は奴隷だったころの話をしてくれた。その彼女をモデルにしたのが、傑作「響きと怒り」(*The Sound and the Fury*) (1929) 中のディルシー (Dissey) である。

自分の一家の歴史を題材にしても、誰か中心になる人物がいないと扱いにくい。フォークナーの場合には、幸いなことに、曾祖父ウィリアム・カスバートという偉大な人物がいた。ヨクナパトーフア物を語るとき、どうしても彼のことを語らなければならない。この章の表題に彼の名を記したのはそのいみである。さて、偉大な曾祖父とは一体どんな人物か、スケッチをしてみよう。

うまれたのは一八二五年、場所はテネシー州 Knox County やがてミズーリ州に行き、父の死後歩いてミシシッピ州のリブリーへ行く、十歳から十四歳の間であったという。一八四五年のこと、マッキヤノンという男

が、旅行中の一家を惨殺するという事件が起った。いろいろいきさつがあつて、犯人は絞首刑になるのだが、その前に身の上話や殺人の話をした。彼はそれをバムフレットに見物人に売りつけ大儲けした。それからメキシコ戦争に参加 *first lieutenant* となる。同じ隊の *second lieutenant* に *hindman* (*Hindman*) という男がいた。彼等は互に友人であつたが、ある日、*hindman* が突然ピストルで打とうとする。不発で、逆に刺殺される。ウィリアムは裁判にかけられるが、正当防衛ということで見逃される。裁判所から出て来たところ別の人間に襲われ又しても殺してしまう、直ちに再逮捕され裁判にかけられるが再び釈放される。リプリーでは *Know-Nothing Party* という結社の指導者として政治的手腕を發揮した。南北戦争が始まると、義勇軍 (*The Magnolia Rifles of Tippah County*) を組織して大佐となる。ヨクナバトリーファ物の中に *Colonel John Sartoris* として出てくるのはこの肩書きのためである。戦争後は鉄道事業に關係する。彼が加わつて作った鉄道のことは、曾孫の作品の中にしばしば出てくる。

一八八〇年には「メムフィスの白バラ」(*The White*

Rose of Memphis) という小説を書き当時のベストセラーになった。*hindman* との争いの内幕が入っているようなこの小説は、一九〇九年に絶版になるまで、三五版をかさね、一六万部を売つたというから、⁽¹⁶⁾ 評判のほどがわかるだろう。その他に小説や旅行記を書いている。そして、一八八九年に、前記の鉄道事業と一緒に關係したことのある、サーモンド (*R. J. Thurmond*) にピストルで射殺された。

以上は、曾祖父の生涯の概略だが、いかに多方面に活躍し、波乱の一生であつたかがよくわかると思う。このような人物を一家の中に持つてば、何等かの形で彼をとりあげたくなるのは自然であろう。第三作の「サートリス」をはじめとして、曾祖父のすがたは、かげになり、ひなたになりして作品中にあらわれてくる。第三作以後の作品群のほとんどすべては、*Colonel John Sartoris* を中心に展開しているといつてよく、異つた話であつても糸をたどれば、彼に結びつけることができるという印象をうける。

フォークナーが最も強い印象をうけた曾祖父を中心に据えて自分の家の歴史を、やがては南部の歴史を描くこ

とになったのは、表現をかえていえば、「家」というものをはつきりと意識するようになったということであって、ヨクナバトーフア物を読む際に考えに入れておかねばならない事柄である。「家」の意識が強いのは南部の特色であるが、これはその保守性に関係がある。アメリカ南部を例にとるまでもなく、我国の農村の構造を考えてみれば、保守性と家の意識の關係は首肯されることである。保守性の強いところでは、自ら自己閉鎖的になる。これによって保守性を正当化しようとするのである。こうした場合、家の意識は同族結合意識へと進み、やがて、自己の家系を他から区別しようとする方向へと進むのである。こうしたところから家と家との対抗意識が生れてくる。自己閉鎖性はますます強くならざるを得なくなるのである。南部のうち特にミシシッピー州の閉鎖性についてはジェイムズ・シルヴァー(James M. Silver)教授が「ミシシッピー、閉ざされた社会」⁽¹⁶⁾の中で明らかにしている。この本は、一九六二年の九月末に起った、「メレディス事件」に材をとって、ミシシッピー社会の白人優越主義にメスを入れたものだが、この中にはフォークナーへの言及もあり、黒人問題についての彼

の意見などがみられる。シルヴァー教授は、ミシシッピーの閉鎖性は絶対的なものではなく、住民が、アメリカ人としての意識にめざめる時、なくなるだろうという⁽¹⁷⁾。たしかにそうだろう、が、その時がいつくるかが問題であらう。

彼が作品の舞台を見出したいきさつについてはすでにべたが、その舞台を扱うにあたって、彼は一つ重要なことをいっている。それは、

There is no such thing as was—only is. If was existed, there would be no grief or sorrow.

である。過去を認めず、現在のみを問題にする。そうすると、彼が自分の家の歴史を扱うのも、南部の歴史に触れるのも、すべて現在のためということになるわけだ。それを拡大すれば、南部の現実ということにもなる。彼が右のようにいったのは、作品執筆当時のことではないから、これを額面通りにうけとるのは危険であるかもしれない。その危険性を認めた上でこの言葉を信じるならば、彼は「サートリス」以後ヨクナバトーフア郡を舞台に次から次へと、現在をみつめた作品をうみ出して行くのである。

「サートリス」では、故郷の土が描くに値するものを知ったとはいうものの、サートリス家を設定してその人物を通し、歴史を概観したにとどまった。その中にはまだ処女作の内容の残滓が感じられるのである。次に出版されたのが、現在彼の最高傑作といわれる「響きと怒り」である。同じ一九二九年の出版といえながら、出来栄えは段違いで、これが同じ作者のものかと思いたくなるほどである。題名をシェイクスピアの「マクベス」に借りたこの作品は、その内容の複雑性、文体の特異性ゆえにやかましい議論をよんだのであるが、この大変な作品も、フォークナーにいわせると、⁽¹⁹⁾成立の過程は単純である。梨の木の上のぼって、窓を通して中で行なわれている祖母の葬式のような木の下にいる兄弟たちに知らせている女の子の、泥のついたパンツのお尻の部分からはじまって、次から次へと話をすすめて行った結果がああなったのだという。こんな単純なことから、複雑でしかも事件の時間的推移が計算されている物語が出来るものかどうか、疑わしいが、他のところでも同じようなことをいっているから、一応信じてよいだろう。

この傑作といわれる「響きと怒り」についていこうとす

れば、「秩序の破壊」であろう。時間の秩序、行動の秩序、道徳の秩序等の様々の要素がすべて破壊されている。作品全体は四部にわかれており、はじめの三部を夫一人の内的独白で語り、最後の部分を作者（と考えてよいと思うが）が語るという構成であるが、最後の部分は別として前三部の語り手がみな程度の差こそあれ、ノーマルでない。就中、第一部の語り手、ベンジイ(Bentley)は白痴である。一体白痴が語るなどということが、どれほどの価値があるのかという疑問が出てこようが、そのような疑問をうち消すように、ベンジイのうめき声がきえてくるのである。しかも、彼の意識（白痴の意識というものが考えられればの話であるが）は事件を一樣には伝えない。現在の事柄を伝えているかと思えば、突然過去にとび、再び現在に戻ってくるといった具合で行動の秩序の破壊がみられる。時間については、行動の説明が一樣になされないということ自体すでに時間の破壊であるが、なお著しいのは、各部分に与えられた年代と日付の順序である。順にならべると、一九二八年四月七日、一九一〇年六月二日、一九二八年四月六日、一九二八年四月八日となるが、全く奇妙な配列である。こういう配列

をみると、お互に夫々独立しているのではないかと思われる。たしかに、各部としては夫々独立してモノロークが行なわれている。だが、フォークナー自身もこの作品の創作過程でいっているように、完成はしていないのである。その未完成の部分是他によって補足されねばならない。たとえば、第一部でベンジイは姉のキャディ(Caddy)について想い出すが、それはあくまで感覚的なとらえかたであり、知的にはとらえられず、そのためにはインテリジェンスのある人物が必要なのである。そこで、第二部におけるクエンティン(Quentin)の役割が重要になってくる。ただし、彼は一九二八年四月七日という時点ではしない。それよりも十八年も前にさかのぼっている。ここで時間のずれが生じるのだが、ベンジイの記憶に出てくるキャディは、まさに、クエンティンがモノロークしている次元のキャディなので、そこで脈絡がつけられるのである。そうして、第三部のジュイソン(Jay)が語るところまで来ると、事件全体により具体的なペースペクティヴが与えられるのである。こうして混沌の秩序の破壊の様相も、第四部になると秩序再建の志向がみられるのだが、果して秩序が得られたのかどうか。

作品の最後は

post and tree, window and doorway, and sign board,
each in its ordered place.⁽²⁰⁾

となっているが、orderがあるのかどうか疑問である。そのすぐ前に、ベンジイがわめきにわめくところがあるだけに。

「サートリス」が出版されたころ、フォークナーは、このあたりでひとつ金もうけをしてやろうと思って、想像の及ぶかぎり最もおそろしい話をかきはじめた。それが後に書き改められて「サンクチュアリ」(Sanctuary)として出版されるものである。この前後は、彼の創作力が充実し切っていたときで、一九三〇年に「死の床に横たわりて」(As I Lay Dying)一九三一年に「サンクチュアリ」、一九三二年に「八月の光」(Light in August)と、現在彼の傑作といわれる作品がつづげざまに出た。先に「響きと怒り」について述べた以上、これらについてもみなければならぬと思うが、与えられた紙数もそろそろ尽きるので、ごく簡単に触れておくにとどめよう。

「死の床に横たわりて」に登場するのは、バンドレン家(Bundren)とその周辺の人々で、母親アディ(Addie)の

死体を埋葬すべく運んで行くという内容を持っている。述べ方は、「響きと怒り」に似ているが、ナレーターの数をふやし、交替でナレーションを行なわせるという方法をとってより複雑になっている。「サンクチュアリ」は、不能の男のとうもろこしの穂軸による凌辱、「八月の光」は白人か黒人かわからない男の悲劇を夫々主として扱っている。いずれも、重要な問題が含まれているのだが、「サンクチュアリ」の場合は、創作動機についての作者の言葉がわざわざいしてであろう、不当に低くみられすぎてきたきらいがある。

フォークナーの努力にもかかわらず、「サンクチュアリ」を除いては評判にならず、一九四六年になって、マルカム・カウリーの手になる「ポータブル・フォークナー」が出版されるまでは、全く忘れられていた。この選集が出たために、フォークナーは再認識されはじめ、一九五〇年にはノーベル文学賞を受賞した。こうなるきっかけをつくったカウリーは眼が高かったといふべきだろう。「八月の光」以後、受賞までの主要な作品をあげれば、「パイロン」(Pylon, 1935)、「アブサロム」(A Book of the Dead, 1936)、「野生の棕櫚」(The Wild

Palms, 1939)、「村」(The Hamlet, 1940)、「行け、モーゼよ」その他(Go Down Moses and Other Stories, 1942)、「墓地侵入者」(Intruder in the Dust, 1948)等がある。これらから問題になるものを指摘すれば、「アブサロム、アブサロム」では、今までとちがって、南部そのものと対決する姿勢を示していること、「村」では、南部敗北後の新興勢力としてのスノープス(Snoops)家を正面に押し出して従来からの勢力にとってかわらせていること、「行け、モーゼよ」では、荒地対人間、あるいは、自然対文明という問題を入れていることがあげられるであろう。

フォークナーは人前に出ることが嫌いであったが、ノーベル賞受賞を機に、積極的に人と接するようになり、一九五五年には我国を訪れて、長野でのセミナーに参加している⁽²⁾。また、一九五七年からはヴァージニア大学で学生達と語り合った。雑誌記者のインタヴューにも応じた。作品の方では、彼が発表した短篇の大部分をおさめた *Collected Stories of William Faulkner* (1951) が National Book Award を得た。その他、一九五七年に「町」(The Town) 一九五九年に「館」(The Mansion) が出て「ス

ノープス三部作」が完成した。全体を暖いユーモアで包んだもので、フォークナーの別の一面、すなわち storyteller としての才能を発揮したものととして注目される。

一九六二年に出た「自動車泥棒」(*The Reivers*) は彼の最後の作品で、副題に a Reminiscence とあるのは、それからまもなく世を去っただけに象徴的である。

「人と作品」としてはまことにバランスのとれないものだが、ウィリアム・フォークナーの生涯を概観した。本稿を作成するに当って筆者は数冊の文献を参照したが、その中で最近出版になった、研究社の二十世紀英米文学案内叢書中の「ウィリアム・フォークナー」に特にお世話になったことを記しておく。なおこの書は、フォークナー案内書として大変よく出来てゐることを附記しておきたい。

(1) ヘミングウェイの死に関しては、おおかたの「自殺説」に対して、夫人は「事故死」を主張しつづけていたが、最近になって、自殺であったことをはじめて明らかにした。(『文芸』昭和四十二年一月号参照)。

(2) Malcolm Cowley ed.: *The Faulkner-Cowley File. Letters and Memories 1944-1962* (N. Y. The Viking Press, 1966) pp. 66-67.

(3) Dorothy Truck: *Crowell's Handbook of Faulkner* (Thomas Y. Crowell Company, 1964) p. 232.

(4) 一九六一年から六二年にかけての「東京大学でのセミナーでカーヴェル・コリンズ教授談」。

(5) John Faulkner: *my brother Bill: An affectionate reminiscence* (N. Y. Trident Press, 1963) p. 130.

(6) *Ibid.* p. 134.

(7) *Faulkner's University Pieces* by Carvel Collins (株式会社) 中に集録されている。

(8) Michael Millgate: *The Achievement of William Faulkner* (Constable, 1966) p. 7.

(9) 註(7)にあげた書物に詩とペン画がいろいろか集められている。

(10) Harry Runyan: *A Faulkner Glossary*. (N. Y. The Citadel Press) 中の引用は同様。

(11) この詩集は長らく絶版であったが、最近『A Green Bough』を合本で再版された(一九六五年 Random House 社刊)。

(12) Malcolm Cowley ed.: *Writers at Work* (The Viking Press, 1959) p. 135.

(13) Norman Mailer: *The Naked and the Dead* 中に明らかになっている下敷きした箇所がある。

(14) 註(13)の書物中一四一頁参照。

(15) Signet 版の *Sartoris* の序文をロビン・キャントウエルの序文参照。曾祖父についてのスケッチは、同序

- 文を参考にしたものである。
- (16) James M. Silver *Mississippi: the Closed Society*
(Harcourt, Brace & World, 1964).
- (17) 同右書一四一頁、一五三頁、一五六頁のあたりを参
照。
- (18) 註(12)の書物中一四一頁参照。

- (19) 同右書の二三〇—二三一頁参照。
- (20) *The Sound and the Fury* p. 336 (Modern Library).
- (21) この時の記録は『*Faulkner at Nagano*』として研究社
から出版された。(一九五六年)
- (一橋大学講師)